

日本植民地文化運動資料 2

北窓

ほくそう

〔復刻版〕

全五巻
別冊 1

満鉄哈爾濱図書館編

日本植民地文化の実態をあざやかに照射する

第一級の総合文化雑誌。

満洲文学、北方文化、満洲国研究に

欠くことのできない基礎的文献。

待望の復刻版。

緑蔭書房



『日本植民地文化運動資料』刊行にあたって

近年、日本植民地の研究は質量とも大きな発展を遂げつつあるが、まだまだ政治・経済的側面への偏重は否めない。より構造的に浮き彫りにするために文化史的な視点からの分析が必要である。本資料集の刊行は植民地研究の上で、これまで不十分であった文化運動関係の資料を提供しようとするものである。

本資料集が対象とする地域は、戦前・戦時中、日本が植民地としていた地域及び占領地域である。即ち台湾、朝鮮、満洲、樺太を中心に中国(満洲を除く)、フィリピン、ペトナム、タイ、ビルマ、マレーシア、シンガポール、インドネシアそれに南洋諸島等の所謂「大東亜共栄圏」とほぼ重なる地域を対象とする。

また対象とする分野は官民・民族を問わず広く知的・精神的・思想的運動を含む。例えば新聞・雑誌・放送・映画・図書館等の諸メディアから教育、文芸、言語、都市計画・建築、社会・生活改造等である。

本資料集は、最初に日本植民地下でどのような集積がなされていたのか、それが最もよくわかる図書館資料を刊行し、随時他の分野の資料も公刊していく予定である。

『北窓』復刻にあたって

満鉄哈爾濱図書館の館報『北窓』(一九三九年五月〜一九四五年三月、全二六冊)は、より広範な読書人を対象に、満洲文化を俯瞰する数々の貴重な文献・資料の紹介に努めた「綜合文化誌」である。その内容は歴史・民族・芸術・教育・出版・書評など、満洲における文化事業の全般に広く及んでいる。

本誌はまた、一種の「文芸雑誌」と見なすこともできる。注目すべき文芸作品がしばしば掲載されると同時に、演劇・音楽・美術などの関連記事も少なくない。満洲文学界を代表する文筆人が、ほとんど顔を並べているのも圧巻である。

この『北窓』のもう一つの特徴は、誌名が示しているように「北方」に向けての多大な関心である。各号、ロシア・シベリア・蒙古・北満についての歴史・地誌的考察、資料紹介に相当のページがさかれている。これは、同図書館が、その前身である東支鉄道中央図書館から受け継いだロシア語の稀観文献を豊富に所蔵していたからである。

さらに本誌からは、中国・ロシア(旧ソ連)、日本の政治的確執の中で育ってきたハルピンという都市の性格を読みとることも、十分に可能だろう。植民地都市の光と影を微妙に反映した本誌は、さまざまな問題を、今日に投げかけてやまない。

『日本植民地文化運動資料』関係年譜

- 明治39年 南満洲鉄道株式会社創立
- 明治40年 満鉄調査部に図書室設置(後の大連図書館)
- 明治43年 韓国併合
- 大正3年 奉天、長春など八ヶ所に図書閲覧場設置
- 大正4年 第一次世界大戦勃発
- 大正5年 列車文庫設置
- 大正5年 南満洲司書会成立・南満洲司書会雑誌 創刊
- 大正7年 大連図書館創立
- 大正8年 朝鮮三一運動
- 大正9年 奉天簡易図書館を本社直営とし、奉天図書館に改称
- 大正11年 衛藤利夫、奉天図書館長に就任
- 大正12年 哈爾濱図書館設立
- 大正14年 『書香』創刊
- 大正15年 柿沼介、大連図書館長に就任
- 昭和3年 張作霖爆殺
- 昭和4年 満鉄図書館業務研究会開始
- 昭和6年 『書香』復刊→19年休刊
- 昭和6年 満洲事変
- 昭和7年 前線兵士への陣中文庫開始
- 昭和7年 満洲国建国
- 昭和10年 『全滿24図書館共通満洲関係漢書件名目録』刊行
- 昭和10年 朝鮮総督府図書館報『文献報国』創刊→19年廃刊
- 昭和11年 奉天図書館『収書月報』創刊→18年休刊
- 昭和12年 日中戦争始まる(7月)
- 『図書館新報』第1次創刊、17号より『満洲読書新報』と改題
- 昭和13年 新制図書館研究会第一回委員会開催
- 昭和14年 大調査部体制となる
- 昭和16年 哈爾濱図書館『北窓』創刊→19年休刊
- 昭和16年 満洲国図書館協会発足
- 昭和17年 満鉄調査部事件
- 昭和20年 日本敗戦

満洲文芸研究の 不可欠な資料

岡田英樹 (立命館大学教授)

「従来の図書館の館報とは大いに形式内容ともに違つたものとなつた。(略)併し、少くとも吾々は、館報が単に館況の報告に止めるべきものであるならば、恐らく『北窓』の発行を企図しなかつたであろう。『北窓』編輯人竹内正一が、創刊号に寄せた言葉である。満洲四大都市のなかで「文化的に最も遅れてゐる」とされた哈爾濱にあって、満洲文化の向上をめざすという、壮大な「文化的使命」にかられて刊行された文化総合雑誌、これが『北窓』であつた。

竹内は、哈爾濱図書館の実質的館長の地位にあり、また満洲を代表する作家の一人であつた。編輯実務にあつた佐々木正も、中川一夫の筆名で文芸評論を発表している。こうしたことから『北窓』は、全満各地の文化人、学者の質の高い文章を掲載するとともに、文芸にも多くの誌面を提供した。竹内も会員であつた同人雑誌『作文』のメンバーの創作をはじめ、北満型合作社事件で検挙された作家、野川隆、埜英夫(政盈)らの数すくない作品もここには掲載されている。わずか全二十六冊とはいえ、ここには、満洲文芸研究上不可欠の資料がまつている。

『北窓』から見える 景色

原山 煌 (桃山学院大学助教授)

このたび、緑蔭書房によって、満鉄哈爾濱図書館報『北窓』が復印刊行されるという。

「日本植民地文化運動資料」叢書の一環で、かの『書香』に続く第二弾とのこと。

『書香』が、「学術的」外装を備えていたのに対して、ちょうど十年後に創刊された『北窓』は、自ら「文化総合誌」と銘うつとおり、より広範な読書人を対象にしていた。

しかし同誌には他の側面もある。当時哈爾濱はまさに北の窓であつた。満鉄哈爾濱図書館と言え、ば直ちに至宝「亜細亜文庫」が連想されるように、主要コレクションはロシア語文献であつた同館の館報という性格をも、この雑誌はしっかりと主張している。例えば連載「北窓滴露」は、多くシベリアやロシアの話題を提供しており、その記事の内容は「文化総合誌」の域を超える場合がしばしばであり、同誌編集者の心意気がよく伝わってくる。

「日本植民地文化運動」に関する資料を体系的に所蔵する研究機関は少ない。そんな状況を考えれば、基礎的資料を着々と発掘・刊行しようとする緑蔭書房の壮図はまさに称賛に値する。

北満文化の一大集積 青木 実 (元大連図書館員)

国立国会図書館所蔵の『北窓』は、旧上野図書館蔵書の移管になるもの、当時の満洲出版物には内務省納本の義務がなかったたので、該書にも欠号分をふくんでいたと記憶している。

このたびその完全本、特にその終刊号に当る「北方文献懇談会」特輯号までを完全に含んでいることは喜ばしい。旧満洲関係出版物のうちで、最も複写要求率の高かつただけにその完本の刊行の学術的意義は大きい。

旧北満洲の満洲里、虎頭、長春からその中心の哈爾濱に至る旧北満鉄路の中心地には、かつて帝政ロシアが極東侵出の根拠地として、シベリア、北満洲の自然各分野に渉る学術的研究の成果を納め、更に満鉄はこれを翻訳してそれが二十数巻に及んでいる。その北鉄を満鉄接収と同時に、従来の満鉄哈爾濱図書館を一本化し、北満文化の中心として、哈日、哈爾濱新聞の日刊紙に加えて、隔月刊の総合文化誌『北窓』を創刊した。

執筆陣には露語堪能の職員を中心に、建国大学教授から、大森志郎、森下辰夫、布村一男等を動員し、弘報処から既に中央国文学界の俊英、仲賢礼(木崎竜)、瀬古確先生ら、法曹界から加納三郎、中央から筆を捨てた、野川隆等々の筆陣を得、「西伯利亚开拓譚」、大橋国太郎の「露書もの語り」等の連載物で北方文化に光彩を与え、今日に至るも新鮮な論文に満ちている。

満洲国の文化状況を多角的・多層的に紹介・考察した研究者必読の 一級資料。

上質のロシア・ヨーロッパ文化の香りあふれる雑誌

川村 湊

(法政大学助教授・文芸評論家)

ハルピンは東漸、南下してきたヨーロッパと、北上、西漸してきたアジアとが出会った町である。そこはまさに「五族」がひしめきあう国際都市だった。ロシア人や中国人や日本人や朝鮮人がいた。彼らはそれぞれの文化や宗教や慣習を持ちながら、雪の結晶のようなモザイク模様を描き、松花江の畔の美しい石畳の街に住んでいたのである。日本人にとってそれは北方へ開かれた天窓であったと同時に、西欧世界への入口だった。そこから見える北方は氷と雪に閉ざされていたけれど、その向こうに文化と学問の香気高い世界があった。瀟洒なロシア邸宅風の建物だった満鉄哈爾濱図書館。それはまさにアジアに開かれたロシア・ヨーロッパの飾窓といってよかった。哈爾濱図書館発行の文化綜合誌だった『北窓』には、日本人が味わった最も上質のロシア・ヨーロッパ文化の香りがある。できうれば、ペチカの火の傍で、紅茶とともにページを繰りたい雑誌なのだが。

本を見ている後姿をよく見かけた。一図書館員であった彼にとって本は、読むためではなく眺めるだけであり、書の香を嗅ぐことだけが今は許されている……と思ったりもした。

眺めるだけ、嗅ぐだけの本としてだけでさえハルピンの北鉄図書館は私にはついに与えられていない。スタンフォード大学のフーバー図書館も涎をたらすほどのものが収蔵されていると聞いていただけに残念無念である。所詮これは運命というものなのだろうか。

あの悲愴な思い入れをする日本語風の「運命」の用法にまさに則するものこそハルピン図書館の運命だった。同様にわが知友にまつわるコトの運びも「運命」という語そのものであった。一九四五年ソ連軍は、ハルピン図書館の本をソ連領に移送するための特別部隊を派遣してきた。「文化を暴力で守りかつ奪う」というところがいかにもソ連風だと思った」と語った故人石井一男は、満鉄の北満経調の庶務課長のままソ連へ拉致され、帰国後満鉄育成学校同窓会長となる。「ハバロフスク郊外のバラックでハルピン図書館の本は朽ちていく運命にある」と語ったのは、ソ連最大の調査機関IMEMOの朝鮮チームの長、柳学亀である。朝鮮総督府からハルピン学院に派遣され、のち日本将校のままソ連に捕えられた。今は金泳三政権のブレインであるという。運命という語がせり上って迫る。

内村剛介 (元上智大学教授・哈爾濱学院卒)

柿沼館長のいた大連図書館へ満鉄育成学校の生徒草野少年の手引で勝手に出入りしていた私は、長谷川四郎のうづくまるようにして小暗い片隅で

ハルピン図書館の命運

ハルピン図書館は亡い。亡いものは無いと言え、というのか。いやそれに対しては「亡いものが今もある」と応じよう。ハルピン図書館の雑誌『北窓』が残されているからそういうのである。この雑誌の寄稿家のうち大橋国太郎は亡いが、同じくハルピン学院生だった橋坂守は健在である。彼ら

にとってハルピン図書館の本は眺めたり嗅いだりするだけのものではなく、よくその血肉ともなつたとすれば、ハルピン図書館は今もまさしく運命としてわれらの内にある。

接收委員と館員(向って右より)



- 第一列 ●大橋國太郎 ●徳永彌武 ウストウリヤーロフ(館長)
 - 田口稔 許成琮(副館長) ●山口吉康 ●狩野采女
 - 第二列 劉宗漢 南文炳 ガウシエ ヤンコーヴスカヤ ●戴文華
 - レスニチエニコ 張蕙琴 蔡運卿 傅靜嫻
 - 第三列 クチユマ パノワ カムコーワ ネチャーエワ 司廉泉
 - 高百良
 - 第四列 孟嘉權 馬熙榮 スクヴィルスキイ 王富久 ロチオノフ
- (●印ハ接收委員)

西伯利亞開拓史譚

第五回

五 アムールの噂……ワシリ・ポヤルコフ

カザク達が西伯利亞の南部及東北部へ進出したことを記述する前に先づ新しい土地を開發し、新しい種族に賦皮税を課した時機に注意し、且つ此の様な全く空前至難の偉業の誘因

行つてい
里、見る
名も知
も居、
幾つ



ロシア史書に就

私が此の雑駁な一文を書くに至つたのは大類伸博士の列強現勢史ロシヤを読んだ事にある。該書附録主要一般参考書中には英獨佛語文獻として三十數冊を擧げてゐるのに日本

前としては(一)齋藤清太郎著露西亞史講話

露西亞月報(三)日蘇通信社編蘇聯邦

日露通信社編ソヴィエト聯邦

種にすぎない。そのあまりに少

語で書かれた——それが譯本で

書を調べてみる氣になつた。

こうして書誌的に集めたものの中には

もの多である。それで大體主要な

北極海

大 編譯 (國語訳注)

Вибля, сиречь Книга свашенного

писания Ветхого и Нового Завета.

[Текст на церковно-славянском яз.]

[193 B595 B.2]

〔M.〕〔прел. 1811.〕1254 стр. 44 см.

を紹介するにとり

尙定期

布 本

Каанб. 183-7.

〔M20 K561 B.1〕

1186 стр. 22 см.

〔M20 K561 B.1〕

北方文化・日本文化・東亞文化

東西文化といひ、また南北文化といふ。歴史的關係においては東亞文化の區別が成立するが、南北文化は混和の傾向にあることは歴史的にも確められるし、また何よ、

れは歴史より、また南北文化といふ。歴史的關係においては東亞文化の區別が成立するが、南北文化は混和の傾向にあることは歴史的にも確められるし、また何よ、

るに人間の生み出すものであり、しかるに人間における異質性、

牛の一毛とも見らるべき性質のものだからである。しかしこれに

照を描き出してゐることは否定すべし、また何よ、

アジアの地圖を開けば、その中央に「世界の屋根」といふ

脈が東西に伸びてゐる。すなはち、この高原より東

崑崙山脈の東端より、東北に向けて陰山山脈、

なはち天山山脈、アルタイ山脈、サヤン山脈、

橋

坂

東西文化が既に
展の必然にす
性、すなは
南北文化

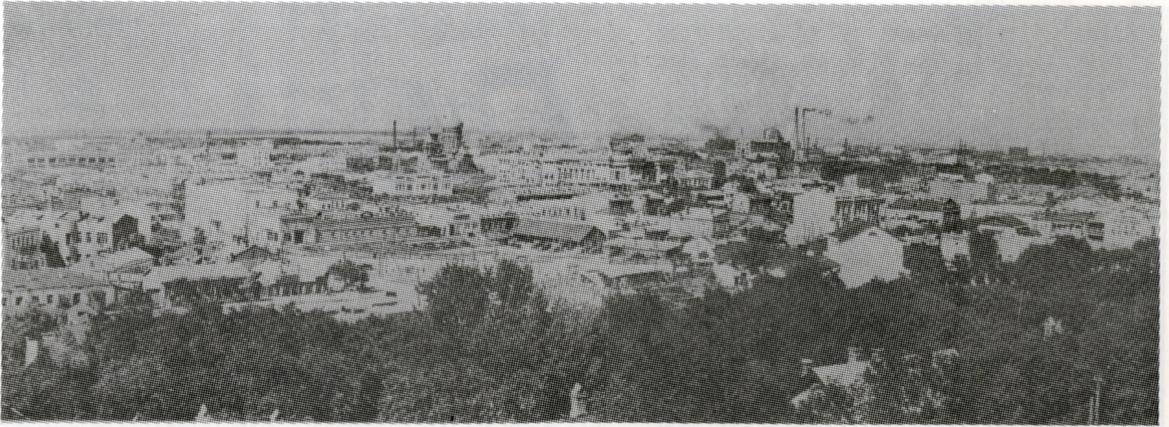
北方文化を志向した知の足跡。

注目すべき記事（掲載順）

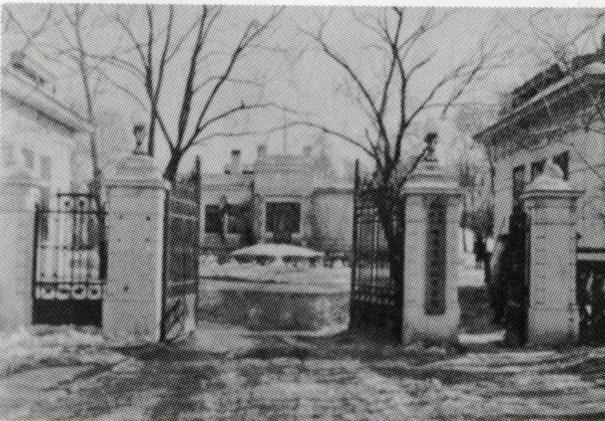
- 北窗滴露（金生道正）連載
露書もの語り（大橋国太郎）連載
西伯利亚开拓史譚（サドニフコフ）連載
義和団史話（コロストヴェツ）連載
歴史に見たるロシア文化の独自性（プシカリヨフ）連載
ロシア史書に就て（布村一男）一卷二号
文化問題の所在（木崎龍）一卷二号
露人最初の満洲开拓者（イワシケヴィチ）一卷二号
満洲文学の独自性・其他（加納三郎）一卷二号
ロマノフ王朝史稿（金在斗）一卷二号
奉天故宮の蔵書に就いて（郝慶柏）一卷四号
文化断片（吉野治夫）二巻一号
満洲邦文雑誌論（青木實）二巻三号
北満の土俗人形を求めて（古川賢一郎）二巻四号
アルバジンツイ区とその文献（田口稔）二巻四号
アムールと人（千田万三）二巻五号
満洲文話会の動向と批判（古川哲次郎）二巻五号
満洲文化の諸問題（中川一夫）二巻六号
満洲に於ける劇映画の諸問題（高原富次郎）二巻六号
満洲国文化政策への希望（山田清三郎）三巻一号
興安嶺麓地帯（菅忠行）三巻一号
日本文化の特質（遅鏡誠）三巻四号
文芸政策の実際問題（大内隆雄）三巻五号
時局と資料（石堂清論）四巻四号
烏蘇里地方古代史研究資料としての一伝説（アルセニエフ）五巻一号
スキート・シベリヤ文化（柿沼介）五巻四号
北方圏の文献学的考察（田口稔）五巻四号

重要な目次（特集を中心に）

- 満洲文化の展望（二巻二号）
満洲文化と青年（三巻一号）
在満新聞文化欄瞥見（三巻五号）
満洲都市生活の検討（四巻一号）
開拓地特輯（四巻六号）
特輯 寒地農業（五巻二号）
北方文献懇談会（五巻五・六号）



哈爾濱全景



満鉄哈爾濱図書館



主な小説作品

屯子に行く人々(野川隆)二巻四・五号
 田舎駅にて(野川隆)三巻二・三号
 義県(竹内正一)三巻二・三号
 P・二哥の話(加藤秀造)三巻五号
 序文(埜政盈)三巻六号
 或るマクシムの手記(長谷川濤)四巻五号
 向日葵(竹内正一)四巻六号
 開拓団まで(井上郷)四巻六号
 耕地(長谷川濤)五巻三号
 色眼鏡(秋原勝二)五巻三号
 凍麥(加藤秀造)五巻四号

文学関係の主な寄稿者

三宅豊子/木崎龍/大滝重直/藤原定/唐木
 順三/島木健作/富田寿/石森延男/合志光
 /吉野治夫/大野沢緑郎/青木實/大内隆雄
 /菅忠行/古川賢一郎/西村真一郎/浅見淵
 /古川哲次郎/山田清三郎/加納三郎/大谷
 健夫/宮井一郎/杜白雨/三井実雄/木畑卯
 一/滝口武士/岩本修蔵/方砂/日向伸夫/
 上野凌嶮/高木恭造/筒井俊一/野原幸二/
 神戸悌/北村謙次郎/坂井艶司

満洲文化を俯瞰する貴重な資料の数々。国際
 都市ハルピンを背景に、このような知の試み
 があった。

回想・哈爾濱図書館

大野沢緑郎

—— 哈爾濱図書館でまず驚かされたのに『重細重文庫図書目録』がある。北鉄接収で譲渡された北鉄中央図書館蔵書中の洋書七万一千余のうち特に満蒙、シベリア他東洋諸国関係の北鉄文献五千余の解説目録。東洋関係文献蒐集では大連図書館、奉天図書館、就中大連の仏語文献は世界的と聞いたが、北鉄図書館のすぐれた北方文献コレクションを加え満鉄図書館は世界的な東洋文献蒐集を形成したわけで、哈爾濱工大の技術書中一万五千点は当時東洋での唯一最大の露語工文学文献の筈だし、白系露人エミグラント図書館も散在、中国人対象には市立図書館があった。——

昭和14年5月に創刊された、隔月刊総合文化誌『北窓』では内外評論の他特に連載物が重要で『露書物語』『北窓滴露』等ロシア語による膨大な北方文献、特に歴史書、開拓史、地誌文献が目立ち、プーシキンの初版本など稀観書と共に貴重な文献は、敗戦後悉くソ連が持ち去ったことが想像される。

(『新書月刊』89年6月号より)

満洲文芸研究・満洲国史研究に不可欠な基礎資料！

日本植民地文化運動資料②

北

【復刻版】

窓

全五巻
別冊1

刊行概要

- 第1巻 全4冊 昭和14年5月～11月 総360頁
 - 第2巻 全6冊 昭和15年1月～11月 総744頁
 - 第3巻 全5冊 昭和16年1月～11月 総628頁
 - 第4巻 全6冊 昭和17年1月～12月 総752頁
 - 第5巻 全5冊 昭和18年3月～19年3月 総606頁
- 別冊 解題(西原和海)・総目次・索引(西原和海編)



体裁 Ⅱ A5判 / 上製本クロス装 / 函入

頁数 Ⅱ 総3,060頁

定価 Ⅱ 揃定価802,400円

ISBN4-89774-004-5 C3000 P82400E

日本植民地文化運動資料

既刊・近刊のご案内

日本植民地文化運動資料① 既刊

書香 (満鉄各図書館報 ↓ 満鉄大連図書館報)

全158号 大正14年4月 ↓ 昭和19年12月

全8巻・別冊1 / A5・B5判・総3454頁

解題—稲村徹元 揃定価144200円

日本植民地文化運動資料③ 近刊

収書月報 (満鉄奉天図書館報)

全91号 昭和11年2月 ↓ 昭和18年8月

全8巻 / A5判・総4130頁

解題—小黒浩司

日本植民地文化運動資料④ 近刊

満洲読書新報 (満洲読書同好会会報)

全95号 昭和11年1月 ↓ 昭和20年4月

全2巻 / B5判・総980頁

編・解題—西原和海

日本植民地文化運動資料⑤ 近刊

文献報国 (朝鮮総督府図書館報)

全90号 昭和10年10月 ↓ 昭和19年12月

全8巻・別冊1 / B5判・総5100頁

解題—藤田豊

(1993.2)

●お取り扱いは

緑蔭書房

東京都板橋区板橋1-13-1

☎03(3579)5444

(定価は税込みです)